



No. 130

ティークレイク

## Tea Break

アルジャーノンに花束を

「アルジャーノンに花束を」はダニエル・キースの作品であり、この話の主人公は知恵遅れのダンである。アルジャーノンというのは実験用のネズミであり、頭が良くなる手術を施される。その結果、知恵遅れのダンよりも明晰なネズミとなる。

知恵遅れの人間よりも賢くなったアルジャーノンは、ダンからは嫌われる。けれども、その当のダンも、そのアルジャーノンと同じ手術を受ける。その結果、頭がどんどん良くなり、高等数学はもちろんのこと、米国人でありながらにして日本語や韓国語なんかも、あっという間にマスターしてしまうようになる。

しかし、その効き目は永遠ではなかった。現に、ダンに先行して処方されたアルジャーノンは、狂気の中で憤死していく。それも、ダンに分かるところで。

そのアルジャーノンを隣に見ながら、ダンも自分の未来を悟るのである。当然のことながら、色々な抵抗を試みるのであるが、運命には逆らうことはできず、知能は日ごとに確実に低下していく。

外国語を忘れていく段階ではダンも不安に思っていたが、母国語まで怪しくなる段階になると、ついには不安すらも感じなくなってしまう。

そしてそのダンは、アルジャーノンを嫌いながらも、彼が最後に言った言葉が「アルジャーノンのお墓に花束を添えてあげて欲しい」ということであり、それがその

ままこの本の題名となっている。

もちろんこれは実話ではない。書籍も、SFの欄に分類されていることが多い。しかしながら、これはどう考えても、SFというよりはむしろ、確実な寓話である。現に、今の地位から落ちようとしている人、もっと端的に言えば、今のパワーがもはや持てなくなりそうな人というのは、同じような軌跡をたどる。

そしてそれは、アルジャーノンの軌跡だけではない。主人公のダンの軌跡もたどる。

自分も、10年くらい前は、ずいぶんと上の地位の人が、その地位にしがみついて抵抗する姿を見て、「醜いなあ」と思ったものである。けれども最近は、「怖いものだ」と思うようになっていく。

ある程度の地位に着いた人。それはどんな地位でもよい。捨てたり手放したりするのが惜しいようなものなのであれば、そういったことが起こる。

そう考えてみれば、それをあえて手放したような人に対しては、花束を贈ったり、ちょっとしたパーティーを開いてあげたりというぐらいは、してあげてしかるべきものなのかもしれない。

(正)